

カボウ谷地の米不足とインパール作戦

武 島 良 成

はじめに

上チンドウイン県は、ビルマ北西部の国境沿いの南北に長い県で、南部のカボウ谷地から中部のホウーマリン一帯は、インパール作戦で第一五軍の主力が行き来した地域だった。日本軍は一九四二年に、県南端のモーライツやパンター、中部のホウーマリン付近までを占領したが、北部のナンユン一帯に攻め込むことはなく、インパール作戦（一九四四年三月～七月）の一時期を除いてはカボウ谷地もイギリス側が統治していた。

同県の戦前の人口は約二〇万人で、統計史料を見る限りはぼ冬米（一二～一月頃に収穫する）の単作地帯だったことになる¹。イギリス当局は同県の米の産量を、平年作で六万九〇〇〇トン、消費（食用と種米）も同量とし、いわば「自給自足」のイメージで捉えていた²。もともと、カボウ谷地は、一九四三年に四万七五〇〇ポンド（二一・五トン）の米を立て替えて英印軍に納入し、その三割は補充されないうままだった。が、この件は端境期にも特に問題になっていない（二／六 四八四、一一〇～一一頁³）。またエレファント・コープスという遊撃隊も、一九四三年度にはカボウ谷地で米をまかなっていた。（二／六 四八四、四六頁）。後で見ると、村々には多少の古米も残っていたようであり、僅かではあれ余剰があったというべきだろう。

ところが、カボウ谷地やその東方のタンドウツは一九四三年後半に雨が降らず、一九四三年十二月～一九四四年一月に収穫された米（粳）は、平年作の半分以下になったようである。またナンユンを含むフーカウン地域についても、

●カボウ、タウンドゥッ地区の地図



中国軍による略奪の影響もあつてか（少なくとも日本軍はそう判断していた）種粳が不足し、一九四二年度産米（一九四三年の消費にあてる）の段階から不足気味だった⁴。イギリス側は、一九四四年二月末にカボウ谷地に米の緊急輸送を始めたが、これもインパール作戦と重なったために打ち切られてしまった。

インパール作戦が、二、五万人と推定できる日本兵が餓死する⁵、無残な結果になった背景には、「飢餓の軍隊」が「米不足の地域」を後背地・退路として作戦を続けた事実もあつたことになる。同時に、少ない米を住民と日本軍が奪い合う惨状があつたことも推測できる。本稿は、このような事実を、ビルマの国立公文書館に残る史料を活用しながら、カボウ谷地の状況を中心に再現し、この戦いの意味づけの一助にしようとするものである。

第一章 凶作とイギリス政庁の対応

イギリス側の上チンドウイン政庁が、カボウ谷地やタンドウツの米不足を予測し、対策を講じ始めたのは一九四三年十一月頃のことである。この時期、これらの地域から、成熟の時期に雨が降らなかつたため、粳が平年の半分以下しか獲れないという報告が次々と寄せられた。ビルマ国立公文書館が保存する上チンドウイン政庁の文書ファイルには、四村長からの報告書が納められている（二／六 四八四、一―四頁）。このうちミンタミー、スンレー、ジービユーゴウンなどのカボウ谷地南エリアの村民は、英印軍が保護できないという理由により、一二月前半から中部のタムー、カメイツ、パンターなどに移住させることになった。一九四四年一月六日に英印軍が作成した報告書では、移住者の数は約一五〇〇人で、以後予測できる増加は九〇〇人以下だとされている。（二／六 四八三、八七頁⁶）、「粳と米はそのままにできた」という表現がなされていることと（二／六 四八三、四七頁）、収穫の時期には若干早いことから、これは着の身着のままの移住だった可能性が高い。ただし、残った住民が収穫をしていたという話もある（二／六 四八三、八六頁）。一九四四年一月初頭の収穫見積もりでは、ジービユーゴウンが粳四〇〇バスケット⁷の見込みで六〇〇バスケットが不足、マルは一〇〇〇バスケットの見込みで五〇〇バスケットが不足、ミンタミー

は平年作の三分の一などとされているが（一／六 四八四、四五頁）、この凶作の中でも、残った住民は自らを養うために粃を刈り入れたということだろう。上チンドウインの政庁は、移住者にまず古米を給付したが、その量は充分なものではなかったようである。付近の村も欠乏したため（二／六 四八三、四七頁）、結局、インパールの第四軍団からの補給に頼ることになった。インパールからの給付米は、初めの三トンがようやく一九四四年一月二―三日に配給された（一／六 四八三、三一、七四頁）。

カボウ中部と北部については、政庁は、例年より早く二月二日までに刈り入れを終えることを命じ（二／六 四八四、五頁）、収穫量の把握に努めた。二月二四日には、ミョウティツの村長に周辺の八カ村の状況に関する報告を提出させている。これは粃の収穫量、消費量を世帯ごとに計算して集計したもののだが、ミョウティツ村では三九〇・八ティンの収穫に対し必要量は八三〇ティンなので、四四〇ティンが不足するという事になった（一／六 四八四、二二頁）。同時に報告されたモーヌエ村については、八五ティンの収穫に対し必要量は七〇〇ティンなので、六一五ティンが不足することになっている（一／六 四八四、二三頁）。二月二七日には、タムーの村長が報告を行っている。タムー地域には一一一戸、支村に三三戸があり、収穫はそれぞれ九五七六ティンと五五五ティンで、古米は二九五ティン残っているだけなので、余剰は出ないというのである。（一／六 四八四、二八頁）。

政庁はまた、ビルマ人警察官を派遣し、カボウ谷地とタウンドゥツについての視察報告を行わせた。二月一二日に作成された報告書を見ると、カボウやタウンドゥツの米の生産は平年の一割で、ミョウティツではあと二カ月の食べ物しかないと報じられている。タウンドゥツは三カ月耐えることができ、その後は南側のミンヤー地区の余剰米を買うことが可能だとされている（一／六 四八三、六六頁）。

このような報告を受けながら、上チンドウイン政庁は、一九四四年一月二日付でカボウ谷地の村ごとの米の過不足の一覧を作成した。これは三一の村について、世帯数、古米と新米、食料の必要量などを計算したもののだが、村ごとのかなりの過不足がある。不足量は合計すると米三八〇ニバスケット、余剰は二三八バスケット、差し引き一四一四バスケットの米（食べ物という意味する「ウンザー」ともいい換えられている）が絶対的に不足していることになる

(二／六 四八四、四〇頁)。この時に仮見積もりがなされた九村については、「ミッシング・エリア」として一月五日に別表がつくられ、米(食べ物)の不足見積もりはさらに三三七バスケット増やされた(二／六 四八四、四二頁)。また避難済みの南部の村についても、本来なら多大な不足が出るという算定が別紙にまとめられている(二／六 四八四、四五頁)。

このうち最初に見積もられた米一四一四バスケット(約一〇ポンド、五〇トンと注が付されている)については、政庁は一月五日付で、インパールに駐屯する第四軍団に輸送を依頼した。八月まで輸送を求めるということだが、これは輸送能力に配慮しながら順次送ってくれということだったろう(二／六 四八四、四六頁)。また政庁も指摘しているが、二三八バスケットという余剰を集めて再度分配するのも、これに匹敵する大仕事だったといえる(二／六 四八四、三九頁)。政庁は、一月八日に集買価格を発表し、同時にどの村がどこから何バスケットずつの米を搬入するか計画を立てた。例えばアフロー村は、プッター村から四三二バスケット、パンター村から二八八バスケットを受けとることになった。マンモー村はカメイット村から五九バスケット、パンター村から三〇二バスケットを、インパールから一四三バスケットをという計画である。このように調整してカボウ谷地での余剰を再分配するとともに、インパールからは一八九バスケットを搬入してまかなおうとしたのである。インパールからの搬入が四八四バスケット増やされたのは、それをウイトウツ村(住民が避難しない最南端の村になる)にリザーブすることにしたからである(二／六 四八四、五六頁)。

が、これは「ミッシング・エリア」の不足が大きく補正される前に立てられた計画であり、タウンドゥツについては独力でまかなうようにと突き放したものであった(ミンヤーからの搬入で対処しろということなのだろう)。あまつさえ、もう少し時間をかけて集計してみると、全体的に不足がこのような規模に収まらないことが判明してきた。例えばクンタウン村長代理は、粃の不足は二五〇ティンにはとどまらず、五二〇ティンに及ぶと訴えている(二／六 四八四、五八頁、一月一日にとり次いだ書類)。一月一六日には、ウイトウツ村長も米は計画通りには獲れないと述べ(二／六 四八四、前六四頁⁴)、二月二日には、粃九〇ティンが不足すると訴えている(二／六 四八四、一一四頁)。

政庁側はこれを受け、さらに古米五〇ティンと僧侶に給付する三〇ティンを考慮に入れながら、数字を修正している（二／六 四八四、一一四頁）。ミンター村長も糶五七〇ティン（米に換算すると二三〇ティン¹⁰）が不足すると訴えているが（一／六 四八四、九二頁）、同村はミョウティツ村に米一〇〇バスケットを供出することを求められていた（二／六 四八四、五六頁）。ミンター村長は、村の六六世帯を、糶が余っている一〇世帯、食食物が充足している二五世帯、足りない三一世帯に分け、供出するならばその後の援助が必要になると述べている（二／六 四八四、一四九頁）。米四三二バスケットを出すことが求められていたプッター村も、二月七日になって、収穫してみたところ糶四一〇バスケット（米にすると一六〇バスケット程度）しか余剰が出なかったと訴えている（一／六 四八四、一二五―一二六頁）。

政庁が三月初旬の段階で作成した、谷地北部（クンタウン以北）についての見積もりでは、一月二日のものより米の不足量が一二〇〇バスケット増やされている（二／六 四八四、一六二頁）。中部（タムー・ワイトウツ）の見積もりはファイルには入っていないが、上述のようにこの地域のワイトウツやプッターで訴えがあったことから、こちらでも修正（増量）が必要だったことは確実である。当初の一四一四バスケット（ワイトウツへのリザーブ四八四バスケットは除外）に加え、カボウ北部で一二〇〇バスケットの追加、中部でも相応の追加があったのなら、インパールから一四一四バスケットを搬入する計画は、少なくとも三〇〇〇バスケット台への修正が求められることになっただろう。同様に、「ミッシング・エリア」での三三七六バスケットという不足の追加予測も、さらに増やされることになっただろう。こちらは、計算の時期が少し遅かったので、前者よりは村の要請に近い数量になっていた可能性もあるが、少なめに見ても五〇〇〇バスケット台の搬入

●カボウ、タウンドゥツの食料事情

	1月2日の見積もり・状況	1月5日の見積もり	3月初旬の見積もり・状況
タウンドゥツ	不足—ミシャーで買わせる		不足—ミシャーでは買えなくなる
北部	1414バスケット不足	3376バスケットを追加	1200バスケットを追加
中部			データなし（追加が必要だっただろう）
ミッシング・エリア			データなし（追加が必要だった可能性）
南部	移住させて軍が給養		移住させて軍が給養

が求められたのではなからうか。

また、タウンドウ地域についても、日本軍の軍事行動の結果、ミンヤーからの搬入は難しくなってしまう。二月一日に同地の助教師が行った報告では、日本軍が一月三日にミンヤーを占領したのだという。そしてタウンドウで販売することを禁じたので、とても次の収穫までは持たなくなつたのである。この報告では、この時点でも穀物が so short だと述べられている。密売もなされているが、それは一〇〇バスケットが八〇〜一〇〇ルピーの高値だとされている（一／六 四八四、一七六頁）。

このように、タウンドウッまでを含めると、インパール方面からは一万バスケット級の米の搬入が求められることになつたと概算できる。が、英印軍による搬送はなかなか進まなかつた。インパールの第四軍団は、一月二三日に上チンドウイン政庁に対し、トラックが不足していることや、ティーデイン（ティディム。インパール南部の入り口）方面の輸送（軍事輸送だろう）を優先させたい意向を伝えている（二／六 四八四、五六頁）。これに対して政庁は二月一〇日に、米のストックがほとんど消費されていることを伝え、「何にせよ最初の一回分の米を早く送ってくれ」と懇願している。到着したらそのままカボウ北部の住民に配るので、四月終わりまでに何とかしてくれというのである（一／六 四八四、一二九頁）。クンクタウン村長も、自分の食べ物を村民にまわしていたがそれも尽き、他の地域から移入している状態だと政庁に訴えている（二／六 四八四、一三八頁）。ヤーネオツ村長の二月一二日の報告でも、米はあと五日分だと述べている（一／六 四八四、一四八頁）。

英印軍によるインパールからの食料輸送が始まつたのは、ようやく二月二四日のことだった。先のカボウ谷地北部の不足見積もり表には、搬入量と受領日も記されている（二／六 四八四、一六二頁）。トラックの証明書・受領証も何点かファイルされているが、その中で最も早い時期のものには二四日付の受領サインがある（二／六 四八四、一五〇〜一五三頁）。これらによれば、三月一日までに一三〇八バスケット（うち二五〇バスケットがミンター村からのものだとすれば一〇五八バスケット）の米を運び込んだようである。が、見積もり表では、クンタウン村以外については、どの村に何バスケットを届けたのかをはっきりとは区分していない。クンタウン村については、村長によ

る受領証が残っているので（一／六 四八四、一六〇、一六一頁）、実際に村まで届いていたのだろう。が、他の村については、三月一日の段階では、証明書・受領証に記されたモレー（タムーのすぐ北方で英印軍の基地があった）までしか届いていなかった可能性がある。

第二章 インパール作戦の開始

日本軍がカボウ谷地に押し寄せたのは、まさにこのように英印軍による輸送が開始されつつある時期だった。同谷地に対しては、三月八日に山本支隊（歩兵第二二三連隊、戦車第一四連隊、砲兵四個大隊が基幹）が前進を開始し、一三日にウイトウツを攻撃した¹¹。一旦攻撃を中止した後、伊藤部隊をモレーとインパールを結ぶ幹線道を遮断すべく出発させ、その上で攻撃を再開し、一九日に占領した。また二月末からタウンドウツ付近に集結し始めた第一五師団は、三月一五日にチンドウイン川を越えて進軍を開始した。その主力はカボウ谷地の北端を通して、フミネ（ミヨウテイツの北方二三キロ）からインドに侵入した。同師団の歩兵第六〇連隊第一大隊はカボウ谷地を南下し、二二日頃にミンターを通過、二二日からモレーの攻撃を開始した。山本支隊の砲兵隊も二五日からこの攻撃に加わった。英印軍は一七日以降、物資をインド側に後送り、やがて部隊もインパール方面に撤退した¹²。伊藤部隊は、兵力差があったためこれを封じることができなかった。結局日本軍は、英印軍退却後のモレーを三月三一日に占領した。

山本支隊はモレー一帯からインドに侵攻し、インパールに南東部から迫った。さらにそこに、インド国民軍の二個連隊が配属された。この頃、第三三師団はチン州から北上し、南方から同市に迫っていた。第一五師団は北方からインパールに迫り、その北側では第三一師団がコヒマを攻撃し、英印軍の補給路を遮断しようとしていた。これらの日本軍は、原則として二〇日分の食料を持つだけの軽装だった。周知のように、インパール周辺にまで退いたのは英印軍の作戦であり、日本軍は同市周辺で強力な陣地によって食い止められた。将兵は無理な攻撃を強いられて死傷を重ね、現地調達でまかなっていた食料もやがて底を尽き、ついには第三一師団が独断で退却を開始するに至った（六月

一日前後)。

日本軍は駐留地での米の徴発を、作戦の準備段階から行っていた。例えば、チン高地に駐留していた第三三師団第二一四連隊は、強制買い上げを続けたので、住民の食べ物がなくなり抗議を受けるに至ったのだという¹³。また作戦中のインパール周辺での徴発については、第一五師団第六〇連隊長だった松村弘大佐が次のように語っている。「主食は連隊本部や各大隊の経理官が少数の兵員をもって糧食収集班を編成し、わが戦線の後方に点在する部落という部落のことごとくを数日又は十数日を費やして駆けまわり収集に努力し」た¹⁴。同じ戦域にいた歩兵第五一連隊通信隊の樋口松雄氏は、小銃を発砲して押し入って「糧秣を徴発」したこともあったと記している¹⁵。コヒマ方面にいた歩兵第五八連隊第五八連隊第五中隊の藤原三郎氏は、集落から命がけで粃を盗んだとしている¹⁶。

このような最前線のみならず、後背地となったカボウ谷地でも食料が集められていた。野戦重砲兵第三連隊に属していた岡村外男氏は、カメイツ(タムーの南方一八キロ)に駐在して収集の事務に当たっていた。氏は回想記によると、軍のトラックに定期的に食料を積み込んだのだという。氏は、近くのパンター(タムーの南東一五キロ)や他の集落でも別の隊が食料を集めていたことを示唆している¹⁷。第一五軍野戦自動車廠の加藤正善氏の回想記にも、タムー・ウィトゥツ間の小集落で、野菜を買った話が載っている¹⁸。またNHK取材班は、日本軍に米や鶏を供出したタムーの村民の談話を紹介している¹⁹。イギリス政庁の一月初期の計画では、カメイツは二五二バスケットを、パンターは五九〇バスケットを、他部落のために供出することになっていた。両村は比較的余裕がある集落だったのだろうが、その余剰は住民でなく日本軍にまわされたのである。しかも岡村氏の回想記によると、パンターの集落は五月頃に空襲で焼き払われてしまったのだという²⁰。その他、集落名は明記されていないが、谷地東部の山岳地域での食糧徴発についても、青木良平、松井保治氏が回想記で触れている²¹。

インパール作戦の中止は南方軍の命令という形で発せられた(七月二日)。それでも第一五軍司令部は攻撃態勢を解こうとしなかったが、既に隷下の部隊は戦闘能力をなくしていた。第一五軍は撤退命令をようやく七月一三日になつて発した。第三三師団主力はチン方面に退いたので、カボウ谷地を通ることはなかった。が、山本支隊はカボウ谷

地の中部を通って東に抜け、第三一師団はフミネから南に向かい、カボウ北部、中部を通り抜けた。一部はフミネから南東に向かい、タウンドウツを通り抜けた。この方面では、最後に第一五師団がフミネからタウンドウツを通って退却した。インパール作戦で最大の死者（餓死者）を出し、通常「靖国街道」「白骨街道」の名で呼ばれるのは、この北部から中部のカボウ谷地とタウンドウツ地区だった。

この時期になると、住民は略奪を避けて姿を隠し、米を奪おうとする日本兵との摩擦は一層激化した。例えば第三一師団衛生隊は、ミンター村で姿を隠した住民を捜し求め、ついには発砲して糶倉に案内させたという²²。同師団の歩兵第一二四連隊に属していた林田守正氏の回想記でも、タウンドウツの南方のシッタウンの辺りで、空襲のどさくさに「住民が日本兵たちから必死に守りつづけてきた米倉」から米を奪ったとされている²³。歩兵第二一五連隊第七中隊（山本支隊に配属されていた）の砂山軍一郎氏も、チンドウイン川の西側で、住民から米袋を盗んだ話を記している²⁴。歩兵第一三八連隊第二機関銃中隊の坂口潤一氏も、タウンドウツの北側でビルマ人集落を襲い、食料を略奪したことを記している²⁵。

それでも、カボウ谷地もタウンドウツも、もともと大変な凶作であり、住民も米を必死で守った。結果、彼らの蓄えを探し出せなかった兵士も多かった。山本募少将（山本支隊長）は、七月一〇日頃から兵員の約半数は全く米を口にできず、モレー付近で集落をくまなく探しても、糶も野菜も見つからなかったと語っている²⁶。朝日新聞の記者だった丸山静雄氏は、山本支隊と共に退却し、七月二〇日前後にモレー、タムーの周辺にいたが、多くの兵士が力尽きる様子を記している²⁷。

まとめに代えて

インパール作戦直後のカボウ谷地、タウンドウツ地区の状況はよくわからない。世界有数の豪雨地帯であるこの地が、雨季を迎え、交通が途絶したために、英印軍もすぐには復帰できなかった。英印軍がカボウ谷地を縦断し、その

南端のヤザジョーを占領したのは一〇月四日のことだった。この頃、上チンドウインの行政も再開され、ミンタミーやスンレー、ジービューゴウン、シッタウンなどの村長に報奨金を与えることが計画された（二／六 四八四、四八六²⁸）。が、一九四四年末期のカボウ谷地の食料事情については、入手できた史料からは判然としない。

それでも、一九四五年五、六月頃にイギリス民政部は、ザガイン（管区）で最も顕著な米不足が起こっていると報じている²⁹。とはいえザガイン南部は有数の米作地域であり、その中心地のシュエボウについては、一九四五年三月二九日の段階で粉が充足していると報告されている³⁰。そのことからすると、最も顕著な米不足が起こっていたのは、上チンドウイン県を中心としたデガイン北部ということになる。一九四四年度産米（一九四四年二月～一九四五年一月に収穫）は、一九四四年六月頃に播種するものだが、その頃の上チンドウインは、少ない粉を求めて日本軍と住民とが争っていた。そのため、十分な種粉が確保される筈もなく、一九四四年度産米に影響したということだろう。一九四七年五月頃の報告でも、上チンドウインから食料不足の訴えがあったというが³¹、一九四四年度米の不足は、この時期にまで尾を引いたことだろうか。

以上、史料の偏りもあり必ずしも十分な分析ができたわけではないが、インパール作戦について、住民からの視点を交えながら新たな切り口を提示したつもりである。防衛庁の公刊戦史では、ビルマ側の史料の活用が難しかったこともあり、後背地・退却路が米の不足地帯だったことは意識されていなかった。この点は、藤原彰氏の『餓死した英霊たち』も同様である³²。が、このような社会的背景を掘り下げることで、社会史だけでなく狭義の戦史（作戦史）の研究も、より正確な、もしくはより豊かな内容を持ち得るのではなからうか。

註

1 一九三八年年度の播種総面積一三万九一三三エーカーのうち、茶や煙草などの嗜好品を除いた面積は一三万六四二八エーカー。このうち米が二万一九八四エーカー（豆やゴマが一万四四四四エーカー）で、その中で冬米が一一万

一一四エーカーを占めていた。日本ビルマ協会『ビルマ統計書』（一九四二年、国際日本協会）の一一二～一二二頁を参照。

2 イギリス国立公文書館所蔵、FO六四三―六／九A三〇一 (Rehabilitation of the Rice Industry in Burma) の一九四四年作成のビルマ米穀業復興諮問委員会のレポートによる。

3 ビルマ国立公文書館所蔵史料。上チンドウイン政庁のファイルで、一九四三年一月～一九四四年三月の、村長からの報告書や政庁が作成した文書を綴っている。記事の大部分はビルマ語で記されている。一／六 四八四と
いうのは史料番号。

4 「第一八師団防衛月報」一九四三年四月分と「第一八師団防衛月報」一九四三年九月分による。共に防衛庁防衛研究所図書館が所蔵、史料番号は南西、ビルマ、六一三と南西、ビルマ、六一五。一九四二年産米については言及されていないが、イギリス側の情報史料によると、上チンドウインではホーマリン周辺以外には休耕地はなく、穀物の状況は良好なのだという（イギリス国立公文書館所蔵、FO六四三―三四／三四／四E一 (C.S.D.I.C. (INDIA), Information Section Report) の一九四三年四月八日号による）。

5 インパール作戦での損害は必ずしも明瞭になっていくわけではない。公刊戦史は七万五〇〇〇人の減員があったとしているが（防衛庁防衛研修所戦史室『イラワジ会戦』、一九六九年、朝雲新聞社、二〇九～二二頁）、後送された患者の中の生還者数を明示してはいない。本稿では餓死者（他の病気の併発を含む）の数を、暫定的に二～五万人と捉えておく。

6 ビルマ国立公文書館所蔵史料。上チンドウイン政庁のファイルで、一九四三年一〇月から一九四四年二月の、カボウ谷地南部からの避難に関する文書を綴っている。一／六 四八三というのは史料番号。

7 ビルマでは一バスケットの容量は地域によってまちまちだが、この時期の上チンドウインでは米一バスケットが約三六キロと換算されている（一／六 四八四、三九、四〇など）。よって、この一バスケットは九ガロン（約一リットル）に相当することになる。

8 ティンはビルマの容量の単位。この時期の上チンドウインでは一ティン＝一バスケットだったので（一／六 八四、九頁）。九ガロンに相当していたことになる。

9 六四～六七というページ番号は二回にわたって付けられている。前六四頁とは一回目の方を指す。

10 通常、ビルマでは粳は精米時に重量が三割減るといふ計算法がとられる。が、当時のカボウ産の山岳米では、六割減とする計算法が使われていた。

11 以下の日本軍の戦闘過程は、防衛庁防衛研修所戦史室『インパール作戦』（一九六八年、朝雲新聞社）を参照した。三月段階の山本支隊の行動は、その四一五～四一九頁による。

12 ルイ・アレシ『ビルマ 遠い戦場』中、一九九五年、原書房、二七頁。

13 塩坪辰実『ビルマ戦線とインパール』、一九八七年、旺史社、八一～八二頁。

14 前掲『インパール作戦』五五三頁。他にも第一五師団の徴発状況については五八六～五八七頁に、第三一師団の徴発状況については五五九頁に記載がある。

15 樋口松雄「現地糧秣補給」、歩兵第五一連隊史編集委員会編『歩兵第五一連隊史』、一九七〇年、共成社印刷、三六七頁

16 藤原三郎「一粒の岩塩」、歩兵第五八連隊第五中隊戦友会『わが中隊の歩み』、一九七八年、弘報印刷、三八二頁。

17 岡村外男『痛恨・カボウ谷地』、一九八三年、旺史社。カメイツ駐留時の話は、一九三～二五〇頁、パンター出張所の話は二一〇～二二二頁に記されている。その他の集落でも食料が収集されていたことは、二〇六～二〇七頁で示唆されている。

18 加藤正善「密林機動線の主役戦車連隊を救出せよ！」林田守正ほか『密林の底に英霊の絶叫を聞いた』、一九九一年、光人社、一〇二頁。

19 NHK取材班編『責任なき戦場 インパール』一九九五年、角川文庫、一八八頁。話し手のウー・バ・ハンが、謝礼に貰った軍票と茶碗を見せてくれたということである。

- 20 前掲岡村二一〇〜二一二頁。日本兵は無事だったが、ビルマの人の死者・負傷者がいたとされている。
- 21 青木良平「食料探し」、二輪会編『ビルマ戦線わだちの跡』、一九七〇年、秀和印刷、一〇三頁。松井保治「背負い子」、『ビルマ戦線わだちの跡』、一一五〜一二七頁。前者は、杓を持って逃げる住民を追い掛けて入手した話。後者は、次第に住民が徴発を拒むようになった話である。
- 22 軽部茂則『インパール―ある従軍医の手記』、一九七九年、徳間書店、二〇四〜二〇六頁。
- 23 林田守正「密林の底の英霊の絶叫を聞いた」、前掲林田ほか所収、六二〜六三頁。
- 24 砂山軍一郎「インパール撤退」、歩兵第二一五連隊戦記編纂委員会『歩兵第二一五連隊戦記』、一九七二年、朝日印刷工業、八二九頁。
- 25 坂口潤一「日本人かビルマ人か」、一三八ビルマ会刊行部『烈一三八ビルマ戦線回顧録』、一九七六年、浪速社、六六三〜六六五頁。
- 26 前掲『イラワジ会戦』一六二〜一六三頁。
- 27 丸山静雄『インパール作戦従軍記』、一九八四年、岩波書店、一五二〜一六二頁など。
- 28 ビルマ国立公文書館所蔵史料。上チンドウイン政庁のファイルで、一九四四三月から一九四五年六月の、タウンドゥツヤチン高地などでの住民の褒賞関係の文書を綴っている。一／六 四八六というのは史料番号。
- 29 イギリス国立公文書館所蔵、WO／二〇三―五二六三A (Burma Administration) に収められたビルマ民政部の一九四五年五月の月報による。またWO二〇三―四三八五 (Civil Affairs and Administration Burma) の中のビルマ民政部の六月一八日の報告も参照。
- 30 Hugh Tinker, *Burma: The Struggle for Independence 1944-1948*, London, Her Majesty's Stationery Office, 1983. この一一一番(上巻) 'Supreme Allied Commander, South East Asia to Secretary of State for War'。
- 31 大英図書館旧インド省図書館所蔵、M 四／三二〇一 (Report: Fortnightly Situation Reports from the Government of Burma) の一九四七年七月分による。

32 藤原彰『餓死した英霊たち』、二〇〇一年、青木書店。インパール作戦については七五〇頁で触れられている。

(本学専任講師)